

下町のロケット

「下町のロケット」は、第145回の直木賞を受賞した池井戸さんの小説の表題です。

作品の内容を簡単に紹介しますと、主人公の佃航平は、かつて研究者としてロケット開発に携わっていました。しかし、ロケット打ち上げ失敗の責任を取って退職し、いまは親の跡を継ぎ、エンジン部品を製造している佃製作所という、従業員200人の小さな会社を経営しています。この佃製作所は、社運をかけて水素エンジンのバルブシステムの開発に取り組んでいます。しかし、親会社の下請けいじめや資金繰り難から、会社経営は厳しく、しかも、競争相手のナカシマ工業から、特許がらみの法廷戦略を仕掛けられるなど、会社存亡の危機に立たされます。

そんな中、ロケット開発を進めてきた帝国重工にとって衝撃的な事態が発生します。彼らが、ロケットエンジンに不可欠のバルブシステムについて特許を申請したところ、佃製作所が既に特許を取得していたからです。ここから、世界的な大企業と下町の町工場との間で厳しい闘いが繰り広げられます。果たして、結末はどうなるのでしょうか？

この作品は、中小企業の悲哀、人間模様を描きながら、大企業と中小企業の関係、更には知的財産や日本のモノ作りの問題などを炙り出しており、テンポも非常に良く、一気に読んでしまいました。同時に、私は、この小説を読みながら、日本のモノ作りについて改めて考えさせられました。

日本の企業の大半は中小企業で占められています。そして、優れた品質の日本製品は、この中小企業が供給する様々な部品によって支えられています。

国内には、設備や予算、人材に恵まれた大企業に対して、知恵と熱意と努力によって大企業にもできないような成果を上げている中小企業が沢山あります。

帝国重工宇宙航空部の財前部長は、佃製作所からの部品調達が可能かどうか調査するため、佃製作所の工場を見学した際、見慣れない光景に足を止めます。それは、試作品を作る工程で、ドリルを操作し、手作業にもかかわらず、まるで精密機械でも使ったように、正確に鉄板に穴を穿つ作業でした。それを見て、財前部長は、「こんな技術、まだあったのか」と感心します。これに対して佃は「設計図通りに試作するに

は、機械より手でやった方が融通が利く。試作工程の効率を上げることになる。」「穴を開ける、削る、研磨する。技術がいくら進歩しても、それがモノ作りの基本だ」と答えます。

埼玉県川口市に、永瀬留十郎工場という鋳物工場があります。鋳物はモノ作りの原点といわれているそうですが、その鋳物作りにもコンピュータが入ってきているそうです。これに対して、社長の永瀬さんは、「ある条件を入れたら、こういう答えが出ますというのがコンピュータだよね。でも、その条件を入れるのは、あくまでも人間でしょ？ 図面を描いてくれたユーザーの意図までコンピュータは読み取ってくれない。」だから100%のコンピュータ制御はあり得ないといい切っています（野村進著「千年働いてきました」）。

小説では、佃製作所の特許が帝国工業のロケット開発の命運をさえ握ることになっています。しかし、こうしたことは、決して小説の中だけのことではないのです。

「痛くない注射針」というのをご存じでしょうか。この「痛くない注射針」を開発したのは、下町にある岡野工業という、従業員5名ほどの小さな町工場です。この町工場は、今も大企業がマネのできない世界一の技術を開発し続けています。このような中小企業は、岡野工業に限らず日本にはまだまだ沢山あります。

今日本は、構造的不況の中でモノ作り産業の空洞化が指摘され、職人の姿も消えつつあります。それでもどっこい、元気な中小企業は沢山生き残っています。

会社は小さくても技術は負けないという中小企業のプライドと、そこに働く多くの職人達の技によって日本のモノ作りは支えられてきた、といっても過言ではありません。こうした、日本のモノ作りの原点ともいべき中小企業や職人達の技の再生こそ、日本経済の新たな成長に繋がる道だと私には思えるのですが。（塾頭 吉田 洋一）